

市史編さんだより

新熊本市史の発刊を祝して

熊本市長

田尻靖幹



新熊本市史は市議会の大いなる御理解のもと、昭和六十二年の熊本一〇〇年懇談会の御提言を踏まえて翌六十二年新熊本市史編纂委員会を設置し、市制百周年記念事業の一

つとしてその編纂に着手したものであります。

この新熊本市史は、前二十一巻を刊行する予定であります。この度、史料編第二巻「古代・中世」、史料編第九巻「新聞（下）現代」、それに別編第一巻「絵図・地図」の三巻の初刊本を刊行することができました。

これも偏に編纂委員の皆様方並びに執筆・編集を担当されました先生方の並々ならぬ御努力と、史料を御提供いただきました多くの方々の御協力の賜であり、深く感謝を申し上げます。

御承知のとおり本市は今秋十月一日より飽託四町との平成の大合併を記念して熊本市のシンボルである熊本城一帯において、「火の国フェスタ・くまもと'93」

を開催中であります。これは温故知新の習いのもと我が国内外に、成長期にある新生熊本の姿、魅力を紹介、地域経済の浮揚とこれからの都市の飛躍につなげようと企画いたしましたものであります。

換言すれば本市のこれまでの歴史に対する認識を深め新しい文化創造の契機にしようとするものであり、その開催と期を一にして、本市の一大文化事業である新熊本市史の初刊本を発刊できましたことは、喜びに堪えません。

本書が既刊「熊本市史」同様広く市民の皆様に親しまれ、そして市勢発展のための指針を見いだす礎となれば幸いに存じます。

新熊本市史編纂委員長

永野光哉



今回の市史編纂事業は熊本市制施行百周年記念事業の一環として始まりました。市史の刊行は昭和七年の熊本市史以来およそ六十年ぶり

編集・発行

熊本市
新熊本市史編纂
委員会

熊本市手取本町 1 の 1

市史編纂室

☎328-2038・2903

目次

▽市長あいさつ	1
▽新熊本市史編纂委員長あいさつ	1
▽特別対談	2
▽発刊本の紹介	8
▽「代用附属」	1
池田小学校の「学校中心自治民育」の実践	10
▽初期 細川家の家督問題	12
▽熊本の花街（四）	13
▽リデル・ライトの FAMILY HISTORY	14
▽日誌抄	14
▽史料調査にご協力いただいた方々	18
▽お知らせ	18
▽編集後記	18

になります。先人が育んだ熊本市の歴史を未来に継承する大事な事業でございます。ちょうど飽託四町との合併や新熊本構想の策定などもありまして、事業はより有意義なものとなりました。

委員会といたしましては、最新の研究成果を踏まえ、全国的に可能な限りの調査と史料収集を展開してまいりました。その結果、この度、史料編二巻と別編一巻を同時刊行することができた次第でございます。

新熊本市史の編纂はようやくその緒についたばかりでございます。今後とも市制百周年記念事業にふさわしい充実した市史の内容編纂に努めて参りたいと思っております。

平素、本事業に深いご理解を賜っております田尻市長はじめ、皆様方の一層のご支援、ご協力をこの機会に切にお願い申し上げます。

最後になりましたが、本書刊行に際し、多くの貴重な資料をご提供いただきました所蔵者の皆様と執筆編集に当たられた関係の皆様に厚くお礼を申し上げます、ご挨拶といたします。

特別対談

わが青春の地、熊本を語る

劇作家 木下順二・歌人 安永落子

司会 井上智重

(熊本日日新聞編集委員)

―お二人に熊本の青春時代を自由闊達にお話しいただき、自ずから熊本のある時代の雰囲気といえますか、風景が浮かんでくれば、と思います。木下先生が東京・本郷から熊本に転校なさって来られたのは。

木下 一九二四年だろうと思います。小学校のたぶん三年。

―元号で言えば、大正十三年ですね。

安永 関東大震災のすぐ後ですね。

木下 そう、震災の時、僕は小学校三年でね、落第したんです、病気でね。で、もういっぺん小学の三年だという時に熊本に来たんです。白川小学校。いきなりの担任は石原先生…。

安永 ええ…。

木下 それから高等学校を卒業するまで足かけ十一年を熊本で送った。

―木下先生が熊本に移って来られた一九二四年、安永先生は？

安永 五歳ですね。

―かわいいう嬢さんだったんでしょね。

木下 そうそう。(笑い)

安永 あの大震災のことはよく覚えています。三歳のころですが、東京から流れてくる新聞。一週間くらい遅れて来ますよね。写真でもなんでも。倒壊した家の写真をはつきりと覚えていますよ。母と二人、新聞をのぞきこんでいる風景まで。熊日の新聞博物館に出かけましたら、その時の写真が出ていました。

―木下先生のお家はもともと玉名の伊倉で惣庄屋で、そうした木下家の家風みたいなものは伝わっていましたか。

木下 家風なんてものがあると感じたことは一度もないな。僕のおふくろは熊本の人じゃありませんし、確か名古屋で生まれて、仙台で過ごしたのかな。開放的な空気のなかで育ったらいいんですよ。おふくろ(僕の実母)は後妻なんですがね。

安永 ええ。

木下 おやじが隠居して熊本に帰ることになった。おふくろにすればまったく知らない土地ですよ。肥後の因習的なものとかね、地主のね。やられたらしいね。一挙手一投足。大変だったらしいですよ。ずっと後になつて言ったことがあるけど、朝起きて髪を結って身

じまいすると、何でもこいという気になったと…(笑い)。結局一人で、水道町にあるルーテル教会で洗礼を受けちゃった。

安永 洗礼を受けられたのはおいくつぐらいのころですか。

木下 僕の中学三年ぐらい。おふくろはいくつだったのだろう。

安永 そのころ、私ルーテル教会の隣に住んでいました。

木下 そうだそうですね。あの教会には僕は行かないで、三年坂教会に行っていました。おふくろとは関係なしに。

安永 メソヂスト教会。私もそのメソヂストに行っていました。

木下 へえ、そうですね。本田牧師ってご存じ？あのころ、本田さんって牧師さん。

安永 お名前は聞いた覚えがありますね。

木下 はあ、そうですね。

安永 母がメソヂストに行っていましたから。するとすれ違ったかもしれない。

教会のある風景

―安永先生のお母さんは福岡の方でしたね。

安永 ええ、福岡。私の母もね、大変熊本弁を嫌いましたね、熊本弁を絶対使わないんですよ。それで私と母はね、妙な標準語。熊本弁を使わないで、変な標準語でいつも父と相対してましたね。(笑い)それで、父は日蓮宗ですけどもおこもりに行ったりするんですね、本妙寺へ。母は必ず教会へ行くわけですよ。

木下 ルーテル教会の牧師さんは石松量蔵という旨目のかたで、戦後おふくろが東京の僕の家に住んでから、石松牧師も東京近郊にこられたので、時々うちへ、



木下 順 二

1914年、東京市伊豆山に生れ、郷里は、五高、玉名大、東大、1947年、以後、シエクスピア

母に話をしに来て下さっていました。一種深い感じのする方でした。

― 熊本は花岡山バンド以来の伝統があつて、教会のある街というのは、どこかモダンで都会的な感じを受けますね。

安永 やはりそうでしょうね、一種のエキゾチズムがあつて。

木下 三年坂に芹川書店という古本屋さんがありましたね。

安永 ああ、ありました。

木下 あそこで、五高の二年の夏の夕暮に、浜村米蔵さんの『簡易なる日本国劇史』という新潮社の本を買ったのが、僕が演劇にかかわるようになったそもその最初のきっかけなんです。安永さんのお店でなくて残念でしたね。(笑い) ほんとに。

安永 芹川書店にはとってもきれいなお嬢さんがおられましたね。先生はそのお嬢さんにひかれて行っちゃったのでは。(笑い)

木下 三年坂教会には宣教師で、何といつてましたか：ピートさん、アメリカ人の。

安永 はい、アゼリア・ピートさん。

木下 そうそう、アゼリア・ピートさん。品のいいアメリカ女性で、日曜学校で英語を教えたりしていた。



安永 路子

1920年、熊本県立権木女子師範学校卒。熊本歌誌「権木」の第2回角川歌人賞受賞。1956年「権木」の第2回角川歌人賞受賞。1956年「権木」の第2回角川歌人賞受賞。

三年坂から安政橋を渡ってずっと行ったところに宣教師館がありましたね。昔の尚綱校のそばだったかな。

安永 あそこにおうちがありましたね。王女会と言つて、教会に来る信者たちの奥さんたちが集まつてバザーとかやりました。その王女会にいつも私は母にくつついて行っていました。

木下 あそこは少し西洋ぽかった。

安永 そうですね。ですから私の妹の永畑道子はね、バザーで買ったアメリカの洋服を来て育っているんですよ。もうそのころは水道町に住んでいて、安政町へ出るとすぐ三年坂。メソヂストは近いんです。

木下 きつとすれ違いですね。

― 木下先生のお家は新屋敷の一の井手沿ひにあつて、いまは公園になっていますが。

木下 昔は大江町宮ノ本と言っていた。妙見さんがあつて。今はもう道がまるつきり変わってしまったて行こうとしても見当がつかない。そうですか、公園になっていますか。あの家は戦争で焼けたんですね。おやじが建てた家なんです。僕が東京に出た後、おやじたちがおやじが生まれた伊倉に疎開することになり、三菱重工が引き取っていた。

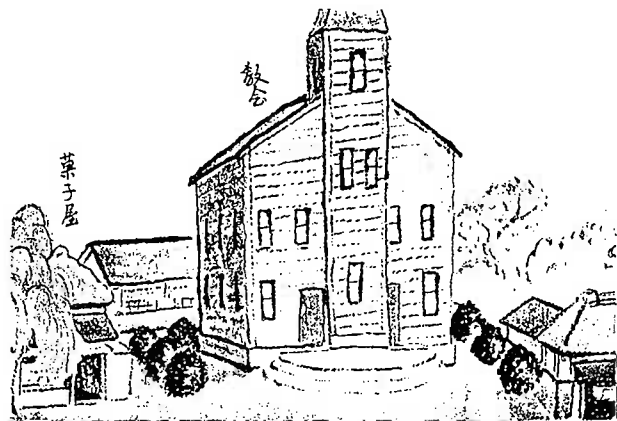
― そこからメソヂストの三年坂までずっと歩いて。お母さんは水道町の横の教会へ。

木下 そうですね。

― お母さんが洗礼を受けられたことについて父上の反応は。

木下 おやじはね、農業技術者で、おとなしい性格でしたし、第一おふくろは誰にも相談せずに洗礼を受けたらしい。さっきもいったように、全然知らなかった熊本という土地で因習と封建性のかたまりの地主一族の中に、しかも長男の嫁として乗りこまされちゃった悩みの果ての洗礼だったんだらうと思いますね。

― そうお聞きして、なんとなくわかってきました。両親とも熊本で、熊本の中にどっぷりと漬かって育つのとそうでないとはずいぶん違うはず。むしろ



甲斐青萍画 (家村哲史氏 蔵)

三年坂教会 (現在の寿屋付近)

お母さんが熊本の方でなかったことで、熊本というものを客観的といいますか、意識して捉えてこられた、そういうふうに思えますね。

安永 それはあるかもしれませんが。子どもはやはり母親に付きますから、母親の味方をする。父と母が喧嘩をしますと、母の方について行くところがありました。だから父はちょっと可哀相でしたよね(笑い)。あとまた生まれたのが女の子で。

しかし、安永先生は実に効果的に熊本弁をおつかいになれる。ところで、木下先生も転校して来てずいぶん言葉には苦労なさったのでは。

木下 純粹に東京生まれでしたからね。非常にいいめられた。しかし、中学三年のころは完全に熊本弁をしゃべっていました。いまの熊大生みたいなものじゃないですよ。ああいう共通語で平均化されたみたいな熊本弁じゃない、純粹な熊本弁をしゃべりました。東京に戻って逆に直さなければならなかった。

苦労した熊本弁

いやはり、言葉が熊本弁でないと付き合ってもらえないという。

木下 それはすごくいいじめられた。(笑い)

安永 先生の『風浪』を読んでいるとそう思いますね、見事な熊本弁ですね。

非常に耳がよろしくて、鋭い音感がなければなかなかあそこまで再現出来ない。

安永 ええ、ですから私たちのしゃべっているイントネーションはおかしいでしょうね、先生には(笑い)

木下 日本の近代文化は東京中心主義ですからね。東京が首都となったばかりに、東京の方が何でも価値が高いと。東京弁もたまたまそれが標準語と称するものになった。そのいきさつはしゃべればいくらでも

説明できますが。白川小の子どもにとっては、転校生の僕がただ単によその言葉をしゃべるといっただけでなく、一段高い言葉として強いられているものをしゃべるといっことを無意識に感じて、その逆コンプレックスで僕をいじめたと、後年になってむずかしく解釈してるわけです。(笑い)

もう一つ、熊本の町には「軍都」という面があったと思います。明治のころから町の真ん中に居すわっていた第六師団の第二十三連隊の練兵場や兵舎が郊外に引越していき、大正末から昭和の初めにかけて中心部の都市改造が行われる。市電も走る。水前寺に西日本一といわれた動物園が出来たのもそのころですね。

木下 僕が熊本に来たころ、人口十三万人だったのを覚えている。そのころ、やっぱり田舎と感じたのは最初、上熊本駅に着いた時に見た当時の菊池軌道の貧弱な軽便鉄道の印象ですね。住んでみるとそう田舎という感じもしなかった。都という感じもなかったけど。安永 日曜日になると、幼年学校の生徒とか遊びに町へ出て来ますね。そんな光景を見てましたね。

木下 軍人関係の姿は多かったですね。大江の家の前はね、陸軍少佐の人の家だったんですよ。少佐になると毎朝、当番兵が馬を引いて来るんですね。町で将校がよく馬から落っこった話を聞いてましたね。その少佐殿ですが、飯に酒をかけて食うという話だったんですよ。その息子が僕と小学校一緒だったんだ。

それに家が練兵場に近いです。妙見さんの横からジャリ道に出ると兵隊がよく行進してて。あのジャリ道は確か兵隊道といってたな。それを右の方へ登っていくと広い広い練兵場がある。その一隅を、冬でも足袋をはかない下駄履きで横切った先に熊本中学はあったわけです。第二次山東出兵というのは僕の中学二年ぐらいの時ですかね。朝、登校中、何という

かこう灰色の感じで、雨々と行進している光景に出会った。まだ「出征」などという景気のいいことばはなく、「出兵」。あれ熊本駅に向かっていったんですね。その隊列の中に馬上の一人の軍人の姿があって、その人が斎藤劉さんだったという説もある。

歌人の斎藤史さんのお父さん。

安永 第十一旅団長ですね。歌人將軍で有名でした。お宅にも歌詠みだった両親に連れられてよくうかがいました。九品寺の今の白川教会のある通りに大きな官舎があって。

官舎といっても借家だったそうですね。

安永 そうですか、大きな家で。軍人の家といっても案外自由でモダンな、山の手風の雰囲気漂っていたようです。隣は飛松さんといってメソヂストの、これまた熱心な信者の方の家でした。

水野破魔子さん(エッセイスト)のお父さんですね。リデル、ライト両女史の秘書兼通訳をなさっておられたとか。ところで、斎藤史さんは小倉高女を出られて、そのころ二十歳そこそこ。

安永 とてもきれいでしたね。水道町で私のところは本屋をしていましたが、史さんのお母さんと私と店員さんと三人、史さんが撮ってくれた写真が残っています。

いちようど熊本に放送局が出来て、その最初の女性アナウンサーの採用試験を史さんは受けようか、と思われたこともあったそうですね。

木下 当時、九州日日新聞に史さんが「明眸」なんて書かれていたことがありますね。あの時、僕はね、自分でラジオを作ったんですよ。鉱石ラジオ。

安永 本当にひとところ鉱石ラジオで聴いていましたね。

木下 それから少しあとおやじが「七球」(真空管

の数」とかいうラジオを買ってね、朝顔みたいなラッパで聴くやつ。伊倉の「竣治さん」と呼んでたおやじさんがやって来て、「はあ、このラジオは言葉が分かりますなあ」と感心したのを覚えていろ。(笑い)普通のやつはガーガーってよく分からないという時代だったんですね。

1 第二次山東出兵は一九二八年、昭和三年ですね。日中戦争のさきがけみたいな。その一方、その時、東京、大阪に次いで九州初の放送局が熊本に開局し、モダンな都市の顔を帯びてくる。

安永 熊本幼年学校の生徒たちが勉強していたものは、外国のことがいっぱいなんです。熊本空襲で図書館なんかも全滅ですよ。それでまず図書館に入ってきた洋書の類は全部幼年学校関係。

木下 ああ、そうですね。

安永 幼年学校の判があって、その上に県立図書館の判がダブって押してある。「えーっ、こんな物が」と思って見ると、幼年学校の紫の印がボンと押してある。(笑い)

木下 日本の近代文化というのは富国強兵を非常に急いだでしょう。文化そのものは封建的、軍隊式だったんだけど吸収して強くなろうという意味では外国をずいぶん輸入しなければならなかった。

安永 そうですね、洋書ってみな厚いでしょう。

1 一九三一年、昭和六年ですが、熊本で陸軍大演習がありますね。

安永 そのころから町がきれいになった。大演習があるために道路が舗装されて。

木下 中学には、「マントクさん」という専任の軍事教練の教官がいた。退役の万年特務曹長だから別名「マントク」。肩章が金筋一本で星がないから「ノー・スター」ともいった。(笑い)帯山かどこかへ引率されて行って、天皇が白い馬に乗っている姿も見た記憶

がある。

1 中学生も全員、陸軍大演習に参加させられたわけですか。

木下 そのところはよく覚えていないけれど、見学に連れて行かれたんじゃないですか。

安永 三月十日の陸軍記念日には、練兵場に学校から全員行くんですね。起立して砂ぼこりの中で嫌でした。何があつてるか分からないのに何かあつてると思うだけです。そして埃だらけになって帰ってくる。



右から安永 木下 井上の各氏

木下 山東出兵からずっと事変が続く。事変というのもおかしな言い方だね。日中戦争のさなかも政府は日支事変と称して押し通しているわけです。それと印象的なのはやはり二・二六ですね。

1 木下先生は最初の戯曲である『風浪』の後記に「(自分の)五高時代は、いわば左翼の退潮とファッショの台頭との間にはさまった、短い小春日和の時期であつたといえる」と書かれていますね。

小春日和の五高時代

木下 確かにそういう小春日和的な時期がちょっとあつたわけだけど、殊に五高にいとね。つまり、旧制高等学校の三年間というのは、非常に有意義な無駄な三年間であつたといろんな人がふり返っているけれど、五高という一種の非常に気持ちのいい雰囲気の中にいて、そういう感想を持ったんでしょうね。

安永 そうですね、皆、五高生を大事にしてましたものね、町の人たちが。あのストームがあるでしょう、毎年。翌朝、町の中は風が去った後のようで大変。

(笑い)看板が無くなつていて、その代わりお向かいのパン屋さんに産婦人科の看板が立っていたり。(笑い)それを元に戻すのが大変。

木下 ことに年に一度の文理対抗ボートレースの後だね。レースの前日、大きな太鼓をね、車に積んで、町の中で応援団長が大演説をぶつ。電車なんかとめちまつてね。(笑い)

安永 あれ、何言っているのか分からないのですが、何となく名文句みたいに聞こえて。(笑い)

木下 そうそう。漢文調のわけも分からん、しかし名文句の演説を長々とやるわけです。(笑い)

安永 町の人も皆、声援していましたから。町中、五高というのを大事にしましたね、あのころ。

「なんとなく熊本の前は懐かしく見える風景だと皆さんよくおっしゃいますが、五高があって、軍人さんがいてもモダンなものもあるし、必ずしもカラー一色ではない。」

木下 そうです。その通りです。

安永 私のところ本屋だったでしょう。五高生が日曜日なんか立ち読みに来るんですね。昔ですから本をバタバタとハタキをかけてるけど、立ち読みしているところにはわざと行かないんですね。(笑い) そんなところが実際ありました。

木下 ありましたね。

「安永先生にとってもやっぱり五高生っていうのは憧れでした?」

安永 そうですよ。素敵だったから。マントがよかったですね。

木下 マントね。酒を飲みによく、徳利やなんかをそのマントの下に隠して持って来ちゃう。また店のほうでは分かってても黙認してた。その戦利品を下宿の鴨居にずらりと並べて得意になってる奴がいたり、嘘か本当か、火鉢までマントで隠して持って来たという話もありました。(笑い)

安永 それとやっぱりあの名物先生が沢山いらっしやいましたから。そんな方たちが町民、町の人たちと生徒さんたちのつなぎになっていました。

木下 それはまさにそうですね。

安永 五高の先生となると文句なしにもう信用しますからね。私なんか師範学校に入学した時、まず父が連れていったのは高森良人先生のお家。漢籍の。「この子に学問を教えて下さい」と。すると先生は「学問は独学です」とおっしゃった。体のいい追っ払いですよ、これ。すると父がね、「宇治の里」というお菓子をそっと出しながら、「お願いします」と。(笑い) 先生は「独学でいいんだけど、四書と五経を暗記す

るまでお読みなさい」とこうおっしゃいましたね。

闊歩する「明治人」

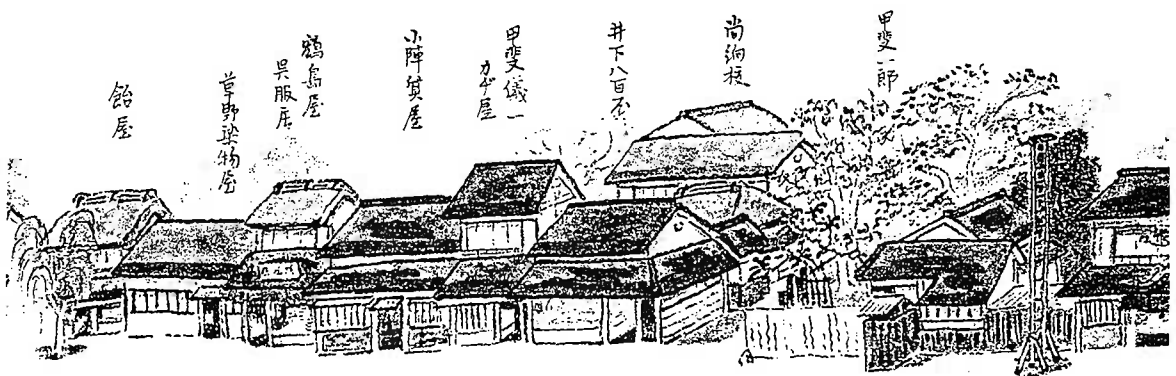
「ラフカディオ・ハーンのこと調べに明午橋近くの白川薬局を訪ねたことがありましてね。その亡くなったおじいさんというのが藤崎(小豆沢) 八三郎。ハーンの松江中時代の教え子で、晩年、濟々餐で英語を教えられた。そこでその老人と熊本中学時代の木下先生と一緒に撮った写真を発見しましてね、木下先生が中学生のころは、そうした老人たちが背筋を伸ばし、町を歩いている風景があったのだな、と思いました。」

木下 藤崎さんのお宅はうちから歩いて五分ぐらいの場所、傘(からかさ) 何番町というところだったかな。おやじも五高でハーンに学んだ一人なのだけども、本当にハーンのことを知っている数少ない一人でしたね。丸山学先生が、僕が五高生のころ、熊本でのハーンの事蹟を調べられたので、よく一緒に藤崎さんのお宅へうかがいました。

「西南戦争前夜の熊本を舞台にした先生の『風浪』の第一稿は一九四三年ごろに書かれていたわけですが、それ以前、先生が熊本で過ごされていたころ、まだ古い雰囲気をお持ちの方があちこちにいられたのではないですか。」

木下 何人もそういう人と会いましたが、内坪井にそうした親戚が住んでいましたね、親戚の中でも一番古風だった。古武士とまではいかないけれど。玄関なんかでの応対でもそういう感じでした。高い床に黒光りのする狭い縁側があるというふうな家ですね。

安永 大正というのは非常に短く、明治の方が大正をずっと通り越して、昭和に生き残ったという方が多かったような気がしますね。私の父なんかも明治生まれで、大正の雰囲気はいっぱい持っているくせに、言



「明治35年の安巳橋通り」

甲斐青萍 画(家村哲史氏 蔵)

うことは明治人らしいことばかり言っていましたね。大正ってまるでこう素通りするような。短いからでしょうね。

木下 ああ本当に短いですね。

―両先生とも大正のお生まれなんですね。

木下 僕は天皇暦というのは一切使わないことになっているんだけど、しかし大正という時代が自分の中にあるということは強く感じますね、確かに。だって大正の初めに生まれて、熊本に来るころ終わったわけだから。

安永 ただ、私の体験ではね、大変不景気でした。貧乏でした、すごく町の中が。浜口内閣の緊縮政策の時代でしたから。電車の安全地帯が私の店のすぐ前にありましたけど、夜になるとね、辻占売りの女の子が来てね、「一枚買って、一枚買って」とこうすがりついて言っているでしょう。夜、店番をしながら、目の前の光景を舞台みたいに見たりしてましたね。

―なにか非常に心もとない、なにか寂しい？

安永 なにか不安な時代ではあったような気がしますがね。

―お二人のお話で熊本の大大正末から昭和ヒトケタにかけての時代の雰囲気がかんできましたが、今回は新熊本市史の史料編がようやく刊行の運びに至った記念の号だそうです。少し市史編纂への期待も含めて最後に少し話していただませんか。

確か鳥居龍蔵が熊本にやって来たのがきっかけになって肥後考古学会は発足したように聞いておりますが、その鳥居龍蔵に木下先生は熊中時代、お会いになってますね。

木下 お嬢さんを連れて熊本の古墳を調べにこられたとき、中学の先生に連れられてついて回りました。

歴史に学ぶ

―あのころ、熊本の歴史を調べようと大きな機運があったような気がしますが。そしていま再び、こうした形のもの（史料編）が作られてきたと思います。安永 資料がなければ何にも書けないと思いますね。一行も書けませんよ。ですからやっぱりひいおじいさんが残していってしゃった『木下初太郎日記』というのが、『風浪』を生んでいるわけでしょう。

木下 それはそうだな。下田曲水さんの『稿本肥後文教史』とか宇野東風さんの『我観熊本教育の変遷』とか当時の雰囲気を知る上で参考になりました。それに市役所が出していた『熊本市史』、これが役立ったな。分厚い一冊本で索引までついている。それから平野流香さんの『肥後史談』とかね。

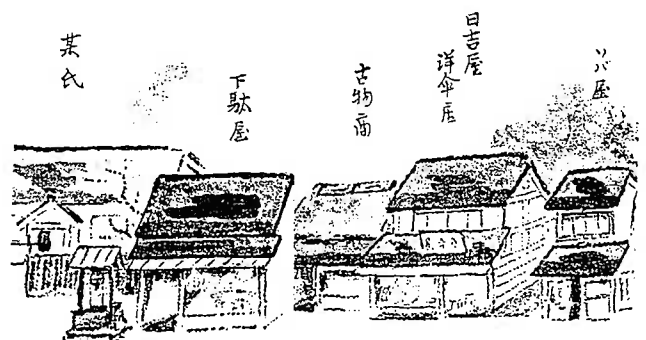
安永 『熊本市史』は紺色の表紙ね。私も持っている。八景水谷の焼き討ち事件なんか載ってたのね。

―しかし、いま改めて思ったのですが、『風浪』が書かれたのは西南戦争からすでに六十六年経っていたということですね。やはり、ずいぶん調べてなり、また想像力でもって再現されている。曾祖父の日記、市が出していた史料、あるいはさり気ないものとか、そういうものを自分の中で消化し、もう一つの世界を作り上げる。そういう作業の過程が大切なんでしょうね。安永 やっぱ歴史を含んだ作品というのはみな共感がありますね。知ってなくてもどこかできつなかりを感じて。同じ血の温かさというか。

木下 そういうふうには歴史をとらえようとして、なかなかできないんですね。

安永 『子午線の祀り』を読んでも他人じゃない気がしますね。登場人物に。

木下 あれは『平家物語』を下敷にした戯曲だけれど、



ど、『平家物語』が十三世紀半ばに書かれた。壇の浦の滅亡が一一八五年。五十年前のことを書いたんですよ。今の我々にとってちょうど太平洋戦争がそうなるわけです。

―そうですね、五十年ですね。『平家物語』の例で言えば、戦争を知らない世代がこれから書くテーマと。目からうろこが落ちる思いがさせられますね。

木下 ただ源平と違って太平洋戦争はあの規模だから、あれを消化して書くのにはもう少し時間があるでしょうね。

―そういえば、この市史編纂の意味も出てくる。

安永 合いますね、話が。編纂事業の意義も見い出していただいたところで終りにいたしますしうか。

※この対談は平成五年八月三日に収録したものです。

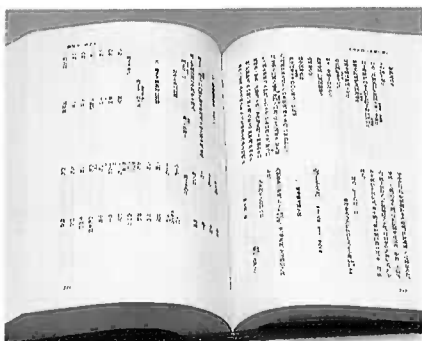
発刊本の紹介

史料編第二巻「古代・中世」

中世専門部会 工藤 敬一

やっと『新熊本市史 史料編第二巻 古代・中世』を刊行することができました。とりかかってから五年、試行錯誤を重ねつ、の困難な編集作業でした。本巻は天正十五年（一五八七）佐々成政の入国以前の文献史料を収載しました。「古代編年史料」は十世紀までの文書・記録・木簡・銘文等ですが、肥後国関係の文献史料が網羅されています。従ってこの部分は、県史史料とでもいべき内容となっていますので、県内の古代史研究に広く役立つものと思います。

「中世史料」は、古代史料に比して比較にならぬほど多くなりますので、今日の熊本市域（旧飽田郡・託麻郡）にかかわる史料に限定せざるを得ませんでした。「中世史料」は文書・記録編と銘文編から成っています。文書は内容上市域にかかわるものと現在市域内に存在するものを、家わけ（所蔵者別）で収めました。これらではできるかぎり原本ないし東大史料編さん所等から提供された写真で校訂しました。このうち



市域にかかわる中世史料の中心をなす謄摩文書は、すでに『大分県史料』や『熊本県史料』で活字化されていますが、あらためて原本によって校訂して全文書

を収めました。この際両者に漏れている文書も発見されました。熊本市所在の乃美文書一七六点は、今回初めて紹介されるものです。内容は毛利氏の有力家臣の乃美氏宛の小早川弘平や同隆景、毛利元就など、戦国期の有力武将の書状が中心です。戦国期から江戸初期にいたる毛利氏を中心とする政治史の史料として、今後話題を呼ぶことと思います。また寄進地系荘園の典型として教科書にも出て来る鹿子木荘や今日の熊本市の中心部を占めていた神蔵荘の史料を網羅したのも本書の特色の一つです。この中にも今回はじめて紹介される文書がふくまれています。

銘文編は仏神像等の銘文と石塔・板碑等の金石文で、ほとんどが今回はじめて本格的に紹介されるものです。いずれも市内に現存するものですから、市民の皆様が「ここにこんなのがあったのか」と再発見されることもありましょう。印刷に当っては字くばり等、すこしでも原型が分かるよう工夫しました。なお、中世史料については、利用の便宜を考え編年目録を作成しました。収載総数、二二七点・九六五頁、私たちは限られた時間の中で、収集・編集・校正等最善をつくしました。本書が市史研究の基礎史料として広く活用されるよう願っています。

史料編第九巻「新聞 下 現代」

現代専門部会 平野 敏也

本巻は昭和二十年（一九四五）八月十五日の太平洋戦争終戦から、平成三年（一九九一）二月十八日の四町合併式典までの熊本市に関連する新聞史料を収録しています。史料の出典は「熊本日日新聞」であります。ここで取り扱っている期間は、四十五年六ヵ月に及び、対象となる新聞史料も膨大な量でした。この中か

ら掲載予定記事を選び出し、部会専門員による長時間の討論を繰り返して、決定に至りました。



史料の選択にあたって根本方針としたのは「二十一世紀へ向けての熊本市発展の指針とする」とともに、市民意識の高揚を図る」との熊本市編纂の目的であります。

そして、この方針に沿い、視点を地域や市民に置き、創造性に満ちた地域づくり、たくましい生活のエネルギーや哀歓のあとを漂わせる史料を、共感をもって採択したのであります。

掲載された史料内容は、政治・経済・社会・文化・教育などの諸分野にわたっています。都市づくりや女性・環境・生活・福祉・健康など、いま当面している社会問題も、もちろん重要な対象となっています。

といっても、史料を編年で並べただけでは、熊本市の現代像を掴むのに不十分な面があります。そこで「概説」という形でまとめました。また「社説」を掲載し、さらに利用の便宜を考え、項目別索引を作成しております。

編纂の過程で特に意を用いたのは、差別的な表現や用語が使われている史料の取り扱いでした。それは当時の社会の誤った認識に基づく不当なもので、絶対に許されるべきことではありません。

しかし史料の内容もまた歴史的事実です。これが不当であるからとの理由で、史実を抹消したり、隠蔽す

ることは、客観的な事実関係を損うばかりか、不幸な歴史に目をそむけることとなります。私たちは差別の歴史的事実や背景を学び、不当な差別や偏見を是正することが肝要であると考えます。

以上のような観点から、基本的人権が侵害されることのないよう配慮しつつ、原文のまま掲載しました。本巻の利用が、人権意識を高め、いわれなき差別の解消に繋がることを願ってやみません。

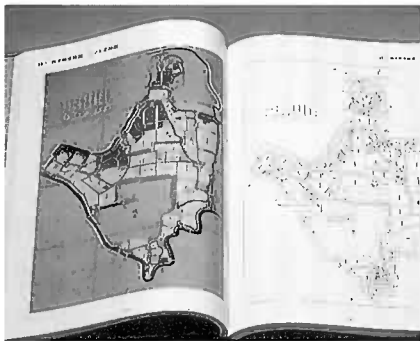
最後に本巻の編集・作成に多大のお力添えを頂いた大勢の方々に、感謝の意を表します。

別編第一巻「絵図・地図」

近世専門部会 森 山 恒 雄

このたび「新熊本市史」の別編として「絵図・地図編」が刊行される運びとなりました。これまで五年余を費して、まずどの様な「絵図・地図編」にするか、そしてどのような絵図と地図を掲載すると、もともと市民に楽しんで見て頂き、よく理解して頂いて熊本市の歴史的發展の様子を知ることが出来るかという点に編集方針をおいて編集をすすめました。これまでに現代の五万分一の一の地図を除いて、中世から近代に至る絵図・地図類についてはほとんど刊行はなく、刊行されていてもそれらは単葉か二、三葉程度、しかも折り込みか付属絵図で、原図をそのまま複製するか縮刷版の形をとっており、市民によく理解して頂くことは困難でした。そこで版を大型のB4版とし、さらに上・下巻二冊に分冊して、上巻は中・近世に、下巻は近・現代の絵図・地図にあてるとしました。そして上巻では市民が読めるように原図とともに専門員が各々読解したトレース版を併用して、それらの絵図の作成時期や町の特徴点がわかるように解説を附しました。このト

レース版併用方式はこれまでにあまり類例をみない方式ですが、現在地が江戸時代どんな地域であったかが歴然となることと思っています。絵図編では、今回初めて紹介する絵図が圧倒的に多いので、中世の隈本地域の絵図写を初め、国絵図、郡絵図、手永絵図等上の熊本市の位置付けがわかるようにするとともに、城下町武家屋敷地帯を各地域ごとに歴史の変遷がわかるように各数葉宛掲載しました。また町人町の絵図として川尻・高橋町図をはじめ、今度新しく発見されました新町・新出町・出京町の絵図を掲載して、町人町の町人屋敷の構成がどのようなものであったかも知ることが出来ることとなりました。これらの結果、掲載する絵図は一〇四点に及び、それは読む人を圧倒するほどのもので、まさに「新熊本市史」を空前の絵図集とすることが出来ました。



下巻は近代・現代の絵図・地図を、出来る限り近代・現代の熊本市の発展の様子がわかるようにという方針で掲載しました。とくに近代では、これまで熊本市合併前の町村史では出刊された例はありませんでしたが、本編ではとくに学界等では注目されながら未刊であった「郡図」「村図」を熊本市域に關係する旧町村も含めてすべて掲載しました。色調も原図に極力近いものとして掲載しました。ただここでは原図使用の文字等が比較的阅读しやすいためにトレース版の併用方式をとりませんでした

が、そのかわりに明治初年に、「郡図」「村図」の本編として各町村からその状況を明細に調査報告させた各「郡誌」、各「村誌」を熊本市域に關する旧町村を洩らすことなく、刻明な点まで読解して掲載しました。そのためその「郡誌」「村誌」を読み、原図を再読して頂ければ、さらに明治初年の各町村の姿を眼前に描くことが出来ることは間違いないものです。それはまさにその量といい、内容といい、一時にこれらを収載したのは初めての事です。近代の市街図・地図は「郡村誌」「郡村図」の掲載の紙幅の都合で止むをえず七点に絞りましたが、それでも近代の熊本市の様子を知りうると思っています。

下巻所載の現代の地図は戦後から新熊本市の発展を知りうるように、主として国土地理院の地図をもつて示しました。五万分一地形図で約二〇年間隔でその変化を示し、ついで二万五千分一地形図で約十年間隔の変化を示すものとして収録する方法をとりました。また新熊本市の現状を示すものとして空中写真と地形図を併用して現況を物語らせました。土地分類図・沿岸海域土地条件図、さらに熊本市観光マップも収載するとともに、今日熊本市の国際化の進展を示すものとして友好・姉妹都市であるサンアントニオ、ハイデルベルグ、桂林の市街図を掲載しました。これもまた訪問される人々が大変便利であるように配慮したものです。これらの地図集もまたまとまった形で熊本市の発展を示す形で掲載したのは「新熊本市史」が初めてのものといえます。

このような「新熊本市史」の別編「絵図・地図」はいずれにしても今回はじめて市民の皆様が直接目にふれるものばかりと思っていますので、出来る限り活用されることを願う次第です。

調査トピックス

「代用附属」池田小学校の

「学校中心自治民育」の実践

近代専門部会 堀 浩太郎

現在、熊本大学教育学部には「附属」と呼ばれる学校・園が四つある。かつての師範学校時代には一九〇七（明治四〇）年まで「附属」は「一校のみであったが、翌一九〇八年四月池田尋常小学校が「代用附属」の指定を受けた。これは、同年発足の師範学校本科第二部（中学校、高等女学校卒業生が入学する一年課程）の設置に伴うもので、教育実習生の増加に対応するものであった。本来は県予算で行なうべき所であったが、当時飽託郡池田村の村立尋常小学校を「附属」として代用することにしたのである。（後年飽託郡健軍村に第二師範学校が設立された時、出水尋常小学校を「第二師範附属」とした例もある）

現在の附属校の性格は、（一）研究実験校（二）教育実習校（三）研究協力校の三点が掲げられている。これは、当時でもほぼ同様であるが、「代用附属」校の場合子どもはまさにその地域の子どもである点が大きく異なる。この点を生かして、一九一五（大正四）年附属校の改革が試みられ、本校附属は「第一部本校」と称し教科を中心に、代用附属は「第二部池田代用」ととなえ民育中心に研究活動することとなった。師範生徒は両校の教育実習を経ることにより、教科の一般指導と応用的練習により民育方面の大体も学ぶこととなった（『九州日日新聞』大正四年一月七日号）。

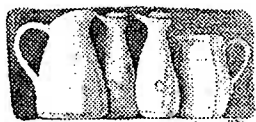
この「民育」とはなんであろうか。前年の一九一四年五月十三、十四日の両日第一師範学校（同年四月、第二師範学校開校を機に師範学校の名称を改称）において、「学校中心民育協議会」が開催され、池田村の自治教育会を始めとする熊本県下各地の民育上の報告がなされた。これは、日露戦争後に展開されてくる地方改良運動の一環で、「学校を中心とした自治民育」の民育なのである。戦争後もなお続く重税、資本主義の一層の展開による各階級階層間の格差の増大による社会不安防止の為、「至誠・勤儉・分度・推譲」をスローガンとする報徳主義をベースに政府は地方改良運動を推進した。学校教育も、補習学校・青年夜学校などとともにこの運動の一翼を担った。その嚆矢は、明治末年の大阪府天王寺師範学校校長村田宇一郎が生野村小学校を代用附属校として展開した実践であった。

熊本におけるこの実践の嚆矢は、「代用附属」池田小学校であった。池田村でも、明治末年保田師範学校長・的場村長時に、青年会・婦人会の結成、農産物品評会・通俗講演会の開催、広島県下の模範村広村の視察を行い、さらに一九二二（明治四五）年二月十一日池田村自治教育会を結成した。同（大正元）年保田校長の後任羽田貞義が五月に着任すると、組織の手直しがなされ、総理（第一師範学校校長）一会長（附属主事）一副会長（村長）一理事（学校職員・役場吏員）一評議員（村公職者・青年支部長・其他有志者）二部会（戸主・青年・婦人・処女）という編制がとられた。また、規則の第二条で「本会ハ教育勅語ニ戊申詔書ノ御趣旨ヲ奉載

シ全村一致ノ実ヲ挙ゲ村格ヲ樹立センコトヲ以テ目的トス」と自治教育会の目的を述べている。

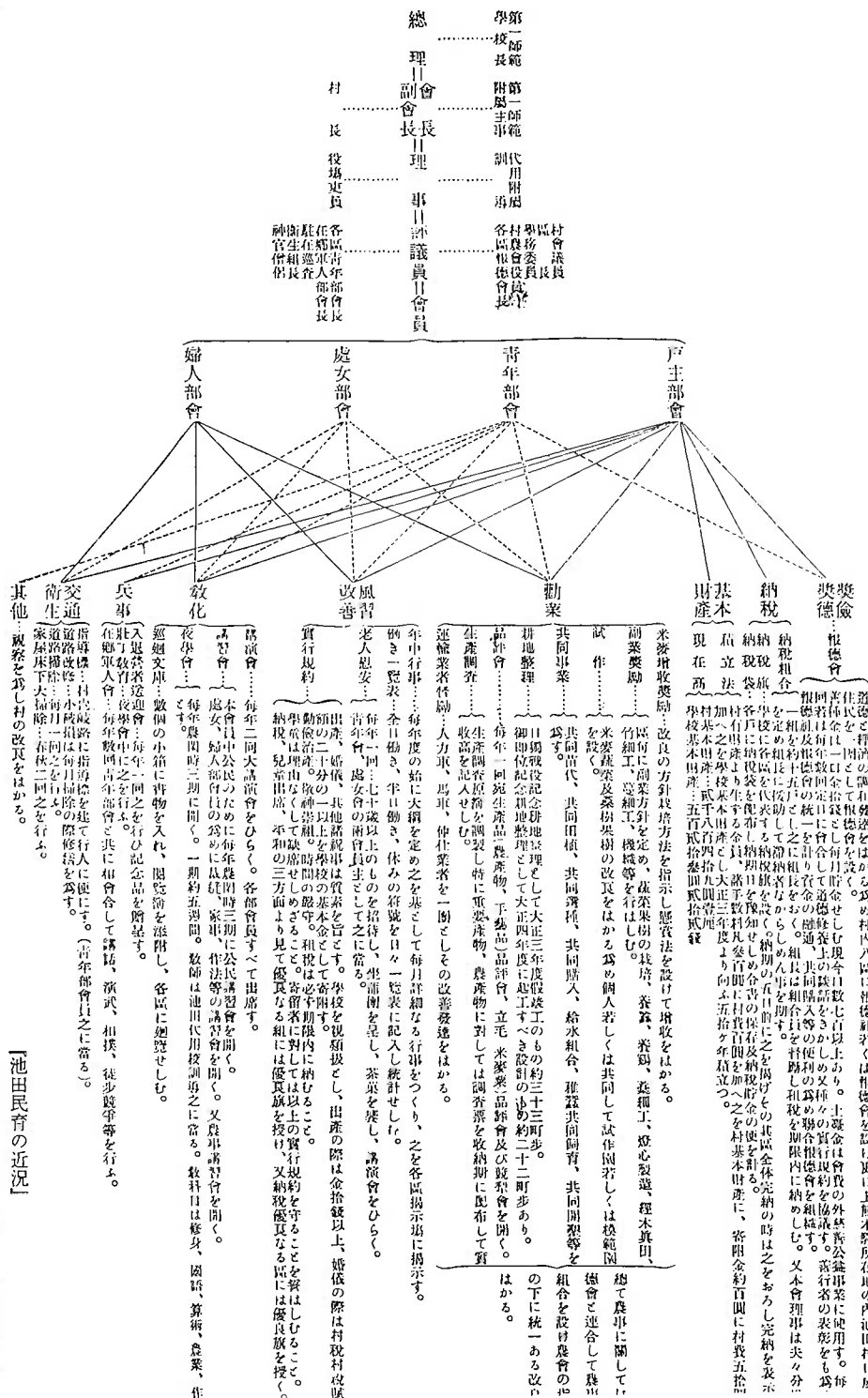
さきの「学校中心民育協議会」は、まさに池田村自治教育会の成果を発表する場であった。第一日目は、池田村自治教育会、池田村自治会各部、同村報徳社及び報徳会の報告があり、最後に羽田校長の「よきことはまねになりともするがよし のちにはなれてまことにぞなる」の歌でしめくられた。午後は、池田村の「民育視察案内地図」により、共同苗代・麦作試作地・夜学所・桑園・学校林・養魚池・試作田・富尾山・同古墳・孝子久蔵の墓を視察し、夜は池田青年夜学会の実地視察をした。二日目は、池田村自治教育実地視察の質疑応答があり、その後地方発表が行なわれた。両日とも、県下各地の視学・校長・教員・町村長その他の参加があり、二三〇名から一七〇名を数えたという。（『九州日日新聞』大正三年五月十四日、十五日号）協議会当日配付されたと思われる資料に、熊本県第一師範学校附属小学校「研究報告 五（民育号）」（大正三年五月十三日発行）全二二〇頁があるが、その一〇〇頁余りは池田代用附属の報告である。

最後に、『池田校創立百周年記念誌』をみると、旧池田村及び池田小学校には何らかの「報徳的なもの（精神）」が今でも存在するように思われた。



第一
池田村民育系統一覽

(在現月四年四正大)



組

池田村自治教育會

事業

「池田民育の近況」

熊本県第一師範学校代用附属池田尋常小学校

大正四年六月二日刊より

初期細川家の家督問題

忠興と興秋・忠利

近世専門部会 吉村 豊雄

肥後細川家の家督は始祖藤孝から忠興（藤孝嫡男）に、忠興から忠利（忠興三男）に継承されるのは周知の通りである。そして忠興・忠利の家督相続の過程で小倉城主興元（忠興弟）・中津城主興秋（忠興二男）の出奔事件を始めとする親族・重臣との政治抗争が続くこともよく知られているが、その実相は余り明らかではない。

私は初期細川氏の権力構造を検討するうちに、嫡男忠隆の廃嫡（慶長四年十二月）後、二男興秋は忠興の家督相続の立場にあったこと、しかし、その後徳川家康が証人として定府中の三男忠利を家督にと望んだため興秋は家督の立場を追われたこと、こうした見通しをもった。そして昨年十二月神戸市の志水清矩氏所蔵の文書を調査し、その中に次に示す細川与五良（興秋）宛忠興知行宛行状（写真）を見出すに及んでその確信をもった。

豊前国上毛郡・同下毛郡内式万伍千石遣之、目録有別紙、永可被知行者也、仍状如件

慶長八年九月十六日 忠興（花押）

長岡与五良殿

進之候

内容は与五良興秋に豊前国上毛・下毛両郡にて知行二万五〇〇石を宛てがうというものであるが、まず注目されるのは同状の発給時期である。忠興が弟興元を領外に出奔させ、興元の居城小倉城に入るのが慶長七年十一月であり（それまで忠興は中津居城）、徳川家康が忠興の「内存」にまかせて忠興三男忠利の家督相続を許したのが慶長九年八月である。つまり興秋へ

の知行宛行は忠興の小倉入城の約十ヵ月後であり、それから約一年後には忠利の家督が決定することになる。細川氏豊前入国当初の興秋の状態についてははっきりしないが、在府中の弟忠利が慶長六年十月の知行割に際して「壹万石」を宛てがわれており（『熊本県史料』中世篇第三・三七九頁）、興秋も万石以上の知行を有していたことはまず間違いないであろう。そして忠興が小倉城を掌握し、中津居城となったことで興秋は中津時代の忠興の知行（蔵入地）を継承する形で上毛・下毛両郡にて知行を宛てがわれたものと推測される。「二万伍千石」という知行規模は出奔した小倉城主興元、最高重臣たる杵築城主松井康之に相当する。

このように興秋は、入国後忠興の居城となっていた中津城に入り、城廻りの上毛・下毛両郡にて二万五〇〇〇石もの知行を宛てがわれており、彼が家督としての立場にあったことは明白である。つまり慶長八年の時点で忠興・興秋の相続ラインは確定していたといえる。それゆえ翌年の興秋の身上の変化には忠興に家督変更をせまる家康サイドの圧力を想定するのが自然だろう。家康がなに故に家督の変更をせまったのか、という点については、今後の検討を要するが、このことが後の中津城の存続、忠興の中津隠居の政治的前提となったことは十分に考えられる。

最後に興秋宛の知行宛行状が志水家に残されている点についてふれておこう。志水家の始祖志水清久（後、伯耆入道、宗加）は「青竜寺以来」の重臣であるが、丹後時代に故あって牢人となり、慶長七年八月に帰参し、中津城を預けられている。清久は興秋の中津入城まで同城を預ったとみられ、その後も中津城の城代的存在として中津にとどまったようである。忠興が隠居中津城に入る時も、城修理の期間中清久の屋敷に居住している。また清久の子草伯部与介（後、志水伯耆）も翌慶長八年九月に帰参しているが、興秋より知行

二〇〇〇石を宛てがわれている（志水家文書）。つまり志水父子は興秋付の家臣あるいは興秋の家臣として仕え、興秋出奔後は再び中津城を預ったとも考えられる。かかる経緯で興秋宛の知行宛行状が志水家の所伝するところとなったとも考えられるが、同文書の所伝についてはもう少し検討を要する問題である。

志水家文書は昨年十二月に花岡興輝・松本寿三郎両氏ともに調査させていただいた。同文書は単に細川氏との関係のみならず、たとえば織田政権論に一石を投ずる史料も含まれており、久しぶりに史料採訪の感激を味わった。調査に多大の便宜をはかって下さったご当主の志水清矩氏に厚く感謝の意を表する。

豊前国上毛郡
下毛郡内式万伍千石
忠興宛知行宛行状
慶長八年九月十六日 忠興

忠興

熊本の花街(四)

民俗・文化財専門部会 鈴木 喬

明治十年九月二十四日、城山の西郷軍全滅によって西南戦争は終結した。政府軍は整然と撤退して出身地に帰り、軍夫らは賃金を受取って帰郷し、年内には世の中は平常の体勢に戻った。翌年には軍費のばらまかれた戦地の戦争景気も終った。十一年になると二本樹の衰退と度重なる売春の摘発が新聞紙上に散見する。売春で検挙された者の出身地は地元の外に長崎・福岡・兵庫などにも及び、その窩主(宿主)として検挙された中には会月楼・鶯亭・高浜亭などの楼主も含まれており、県警察が厳しい態度で臨んだことが知られる。ところが此の年六月に明十橋通りで興行中の相撲芝居が大当りして、珍らしく大入りとなり、そのお蔭で再び二本樹が賑いはじめた。相撲と花柳界とは由来切っても切れないつながりがあったのである。十二年の一・二月には若松楼や橘亭・松喜亭の名が新聞紙上に見えてくる。松喜亭は坪井馬借町の山田喜三郎という人がはじめ菊川亭と名づけて開業し、京町では喜楽亭と称し、二本樹に移って松喜亭と改称したもので、先号の写真に看板の見える店である。五月から七月にかけては二本樹の芸・娼妓を主題とした投書が続き、「買妓於二本樹」「猫賛」「猫の阿隣ノ解」「春夜宴双樹園序」「娼妓阿藝傳」などの戯文が紙面を賑わしている。ところが七月になるとコレラが大流行して、またまた貸座敷街は寂々として火の消えたようになった。楼主

等は八月五日の北岡神社の大祭を契機として景気の回復を目論んだが、県はコレラ流行のためにこの祭礼を差止めたためこれも不発に終わった。北岡の祭礼が許されたのは九月も末の二五日からで、二本樹貸座敷からは待っていましたとばかり芸娼妓の手踊りや飾馬を奉納して華を添えた。ここでおかしかったのは清川亭の事件である。亭主石原利市は女将の氣に入らず、養子であったため女将から離縁されてしまった。これを怨んだ利市は清川亭の売春の事実を警察に訴えた。ところがそれは和市長が亭主であった時期のことであったため、売春の娼妓とともに訴え出た本人も窩主として呼



並家郭遊樹二本

び出され、散々に絞られた未過料に処せられたのであった。十一月になるとコレラは完全に終息し、二本樹の避病院も閉鎖されたので、一日亭は旧藩時代の轡師河田金次郎(次郎兵衛)に委託して菊花壇をつくり、各亭も客寄せに趣向をこらした。ところが十二月、県は芸妓と娼妓の二枚看板を禁止した。この趣旨を誤解した二本樹の芸妓達は大笑して県庁に出頭し、娼妓との兼帯鑑札を出願し、警察から説諭されて引揚げるといふ一幕もあった。

十三年の正月、各亭は店頭の前柳の枝に造り物を下げ、芸娼妓は着飾って羽根をつき毬をついて楽しんだ。しかし一般人と貸座敷間の摩擦は絶えない。吉本楼の借家に入った旧士族が蠅縮工場の夜中の午前三時か四時頃から運転を開始し、貸座敷の客の安眠を妨げる。何と頼んでも生業だからと言って取り合わない。吉本楼としても店の盛衰に関係するので放置できない。遂にたまりかねて、蠅縮所の営業差止めを交番に訴えて出ているが、その結末は明らかでない。

娼妓にも色々あって、和泉屋の西浜歌は別嬪で有名であったが代書人と人力車で外出したまま行方をくらましてしまった。一方同じ娼妓でも昨年から満月楼に身を沈めた糸鶴は元貴顕出身の美人で、漢籍を読み洋書を学び、糸竹の道に優れ漢詩も詠み、才色兼備の女性であると新聞紙上で手放しの讃辞を贈っている。先般の芸娼妓の二枚鑑札禁止によって芸妓鑑札なしでは三絃を客の前で奏してはならぬことになっていたが、三月末にこの規則が改正され娼妓達は大喜びしている。六月に熊本新聞に「遊廓廃止論」の投稿が一回にわたって掲載されると二本木猫女の名で情実を尽した反論が掲出された。しかし今年もコレラの流行が心配され、紙幣下落と重なって再び双樹の客足は遠のき、閑古鳥が鳴く有様となった。

リデル、ライトの FAMILY HISTORY

ー ロンドンからの報告 ー

近代専門部会 猪 飼 隆 明

一

大日本帝国憲法がロシア憲法の強い影響のもとに生れたことについては周知のことである。しかし私は、その憲法のもつ市民的自由の側面（これは通常権力の専制を隠すいちぐの葉だと理解されている）が、専制性の不可欠の要素ではないか。それをイギリスと日本との具体的な関係の中で検証できないかと考えて英国にやって来た。在外研究の目的を、そのように文部省に届けてきた。

この課題については、まだまだ報告できるものを手に入れてはいない。ただ、英国の法学者 Francis Taylor Pigott と井上毅とを結ぶ線上に KAZUO HATOYAMA（鳩山和夫）という人物が浮んでおり、今後の大きな手懸りになりそうだといいことを書くに止めておきたい。

昨春秋、たまたまハンナ・リデル Hannah Riddell エダ・ライト Ada Wright 関係史料の整理を担当することになった（実際の整理は藤本桂史氏によって綿密に行われた）のがきっかけで、私のロンドンでの研究生活に、この二女史の出生地や家族、生い立ちなど来日までのことを調査するというテーマが付け加えられた。時間はたっぷりあると思っていれば、はや五ヵ月が過ぎてしまった。この間明らかにできたことはまだまだ僅かであるが、それでも興味ある事実がいくつか判明したので、この場をかりて報告しておきたい。

まず、ハンナの生地および両親について。

飛松甚吾は、その著「ハンナ・リデル」の中で、

西暦一千八百五十五年十月十七日、英国北倫敦、バーネット街に孤々の声を上げたミス・ハンナ・リデルは唯一人の愛し児として父母の温き愛撫の裡に育てられ……

と書いている。「秘書として側近として」（小笠原嘉祐

「出会い」の真実」同書復刻本）ハンナを支えてきた

飛松の言葉である。多くリデルについて語る人は、このような表現をして来た。

しかし、これは誤りであった。ハンナの出生証明書（かつては Somerset House が資料の管理と証明書の交付を行っていたが、最近この業務は St. Catherine's House が行い、Somerset House は一八五八年以来の遺言状 Wills を扱う役所となった）には、No. 9 The Barrackes Barnet South Mimms とある。これは Middlesex and Hertford 州 (County) の South Mimms (現在は Mimms) の区に小さな Barnet 地区があることを意味し、The Barrackes は兵舎のことなのである。現在 Barnet は London Borough of Barnet という自治体となっている。（ちなみに私の寓居もここにあり、私はここに Council Tax を納めている）。

七月の中頃、漸くこの地をつきとめ、車を走らせた。今は High Barnet と呼ばれる地域の一隅で、ハートフォード州 Hertfordshire とのほとんど境にあった。記録によると、このバレットは、The Royal 2nd

日誌抄

平成五年

1・5	現代史料調査（集合校正）
1・6	現代史料調査（集合校正）
1・7	市史編纂だより座談会（リデル・ライト記念老人ホームの史料調査を終えて）
1・8	現代史料調査（集合校正）
1・12	第三十二回部会長会議（部会間の調整事項について）
1・13	現代史料調査（集合校正）
1・16	現代史料調査（集合校正）
1・16	第十九回民俗・文化財専門部会（聞き取り調査報告及び検討）
1・18	市史編纂事業先進都市調査（新潟市・甲府市・藤沢市）
1・18	現代史料調査（集合校正）
1・19	第二十六回近代専門部会（近代史料編Ⅰの構成について）
1・21	現代史料調査（集合校正）
1・21	中世史料調査（集合校正）
1・24	現代史料調査（集合校正）
1・25	第二十一回原始・古代専門部会（今後の調査活動について）
1・27	自然史料調査（植物調査報告・検討）
1・30	岡山市史編纂室来訪
2・1	現代史料調査（集合校正）
2・1	中世史料調査（集合校正）
2・5	近代史料調査（近代史料編の構成について）
2・5	近代史料調査（郡村図校正打ち合わせ）
2・7	中世史料調査（集合校正）
2・12	第二十二回近代専門部会（近代史料編Ⅰ収載史料について）
2・14	中世史料調査（集合校正）
2・17	現代史料調査（集合校正）
2・18	現代史料調査（集合校正）

また、すぐ南にはセント・ジョン・バプティスト教会 St. John the Baptist Church が聳え立ち、北側にはクライスト・チャーチ Christ Church とバプティスト大教会堂 Baptist Tabernacle が道路を挟んで建っているが、恐らく当時の姿とはとんど変らないものであったらうと思う。

英國では、一八四一年に戸口調査 Census が始められ、以後一〇年ごとに行われて来た。このときには大量の Enumerator と呼ばれる調査官が雇われ、それぞれ the enumeration district と呼ばれる調査区域を street ごとに戸別訪問してついで仕上げるのである。一八四一年の最初の調査は、情報量も少ないが、一〇年後の五一年からその内容は、結婚の有無、各個人の当主 (the head of the household) との関係 (妻・息子・娘・召使...)、年齢、出生地、そして障害の有無などが書き込まれるようになる。そして調査は、救貧院 (workhouse)・学校・監獄・病院あるいは兵舎・ドック入りの船舶にも行われるのである。面白いことに、そのときまたま居あわせた訪問客 (Visitor) についても記録される。日本の戸籍制度は、周知のように本籍地と居住地の二重戸籍であり、本籍で家族の全構成員が把握される。それに対して英國 (欧米に一般的) では、居住地主義を原則としているから、旅行先でもそこで調査の対象となるのであろう。この Census は四月に行われるようである。[PUNCH, OR THE LONDON CHARIVARI] という新聞の二八六一年四月二〇日号に、「The Census」の風刺絵があり、その下に、当主が来客に向つて「あなたの年齢も書き入れなきやありませんが、何と書きましょうか」と言うとき、「それは正直に書かなきやならなくてよ、二十歳の誕生日を終えたばかり」と、いかにも四〇歳は越した婦人が答える、という会話が描かれている。こういう調子だから、日本人の私たちからみれば、どれほ

2	・	19	近代史料調査（郡村図集合校正） 民俗・文化財史料調査（聞き取り調査報告）
2	・	20	中世史料調査（集合校正）
2	・	21	近代史料調査（郡村図集合校正）
2	・	22	中世史料調査（集合校正）
2	・	23	第二十二回原始・古代専門部会（今後の調 査方法について）
2	・	24	近代史料調査（新聞採択記事の見直し）
2	・	24	現代史料調査（集合校正）
2	・	24	中世史料調査（集合校正）
2	・	25	近世史料調査（収蔵予定史料検索調査）
2	・	25	中世史料調査（集合校正）
2	・	26	中世史料調査（集合校正）
3	・	1	近代史料調査（新聞採択記事の原稿化に伴 う打ち合わせ）
3	・	1	中世史料出張調査（国立公文書館）
3	・	3	中世史料調査（集合校正）
3	・	5	第二十三回近世専門部会（近世史料編Ⅰ取 載史料について）
3	・	7	近代史料調査（郡村図集合校正）
3	・	10	中世史料調査（集合校正）
3	・	11	近世・近代合同部会（史料編の時代区分調 整）
3	・	11	近代史料調査（郡村図集合校正）
3	・	13	近代史料調査（郡村図集合校正）
3	・	15	原始・古代古墳測量調査（橿崎上古墳）
3	・	15	近代史料調査（郡村図集合校正）
3	・	16	近代史料調査（郡村図集合校正）
3	・	17	第三十二回部会長会議（平成四年度事業報 告及び刊行年次計画について）
3	・	18	近代史料調査（郡村図集合校正）
3	・	19	近代史料調査（郡村図集合校正）
3	・	22	自然史料調査（植物調査報告及び新年度計 画について）
3	・	22	第二十七回近代専門部会（通史編・史料編 の構成について）
3	・	23	第十七回自然専門部会（動植物分科会報告 及び新年度具体策について）

ど正確に記載されたものか、洩れや二重記載はないのかなど心配になるが、Family Historyの調査にとっては実に重要な史料なのである。

このCensusはPRO(Public Record Office)でみることができ、いつも調査に来る人であったがえしてゐる。英国は、系図(Family Tree)とFamily Historyに関する関心がとても高く、先St. Catherine's Houseも、PROも、そういう人たちのための便宜を図っている。そして史料は100年以前のものについては、一般に請求ができるのである。ただ、Censusについては、どこに住んでいたのか(最も好都合なのはそのstreetが分っていること)を、あらかじめ知らなければお手上げなのである。

さて、ハンナが生れてから最初のCensusは一八六一年であるが、Barracksを含む地域のマイクロフィルムにその家族の名をみつけ出せない。考えられるのはこの六年間に移転したか、その調査の折たまたまいなかったかである。

しかし手がかりがない訳ではない。父ダニエル・母ハンナの死亡証明をみつけることができたからである。一八八六年八月二八日に母ハンナは肝臓がんで死亡(七二歳)、二年半ほどおかれて一八八九年三月六日「リデル・ライト両女史記念祭報告集」の年表に三月八日とあるが、これは登録を行った日に、父ダニエルも七七歳で死亡した。そして、その死亡の地が二人ともRussel House The Mumbles Gower Easternなのである。The Mumblesと云うのは、南ウェールズのCarmarthen Bayに突き出した小さな半島Gowerの南のつけ根に程近く、これまた Swansea Bayに向って小さく突き出たところの漁村である。Censusでは漁師とか舟乗りがたぐさんでくるところである。ハンナの家族は、The Barracksのあといずれかの時期にここに移った。恐らくこのThe

Mumblesがその近くに本来の実家があったのではないかと想像される。

母ハンナの死に立ち会ったのは孫のB. Wright父ダニエルの死に立ち会い死亡登録をしたのは娘ハンナである。ハンナがここに住んでいたのは確かであるが、不思議なことにCensusにその名を見つけないでゐる。Russel Houseなる通りもでてこないのである。

興風会長相場駒次の名で、明治四十二年一月二八日にハンナの「善行」を表彰した折の「仁慈」なる表彰文中に、「年少にして父に従ひ『サウス・ウエルス』に移り、父母の膝下に奉養す。慈善事業を以て最上の善事とし、毎年二・三回音楽会を開き、其収入を以て貧民に施与し、或ハ警察官を援けて彼らの徳性涵養に努む」とある。父ダニエルのことであろうが、これがThe Mumblesであるとすれば、きつと史料はあるはずである。近く南ウェールズに行つてこようと思つてゐる。

三

つぎにエダ・ライトAda Wrightのことについて報告しておこう。こちらの方は、この間いろんなことが分りかけて来た。母ハンナには先夫Wrightとの間にサミエルSamuelという息子(娘ハンナの一一歳年上)がいたことについては先に述べたが、彼は成長してミランダMiranda(旧姓Neades)と結婚し、男女二人の子をもうけた。男子は父と同じサミエルで一八八八年七月六日に生れ、一年半後の一八七〇年二月一二日(日本側の記録に二月一三日とあるが、出生証明書では上記のとおり)に生れたのが、エダAdaなのである。エダは136 Central Streetに生れつゝ

3・24	第二十六回現代専門部会(新聞史料編総括及び史料編第八巻の編集方針討議)
3・24	民俗史料出張調査(遠野市・平泉町)
3・25	近代史料調査(郡村図集校正)
3・26	近代史料調査(医育会館所蔵史料)
3・27	近代史料調査(御馬下の角小屋所蔵史料)
3・28	中世史料調査(集合校正)
3・29	中世史料掲載許可依頼(大分市詫摩家)
3・29	第二十回民俗・文化財専門部会(平成四年度事業総括及び平成五年度事業分担について)
3・31	現代史料調査(史料編第八巻の作業日程・方法について)
4・1	近代史料調査(新聞史料編の原稿編集)
4・2	第二十四回近代専門部会(平成五年度事業計画及び近代史料編I収載史料について)
4・5	近代史料調査(新聞採扱記事の原稿化について)
4・12	近代史料調査(県政史料の収集方法について)
4・19	第二十八回近代専門部会(平成五年度事業計画について)
4・23	第三十三回部会長会議(第十二回新熊本市史編纂委員会提出議題について)
4・24	現代史料調査(史料編第八巻の史料収集、編集方針及び凡例等について)
4・24	第二十一回民俗・文化財専門部会(平成五年度事業計画及び各専門員の作業割当てについて)
4・25	近代史料調査(近代史料編I収載史料検索)
4・30	近代史料調査(公文類纂収集方法について)
5・1	近代史料調査(瑞鷹酒造聞き取り調査)
5・7	近代史料調査(新聞史料原稿化統一作業)
5・10	近代史料撮影(瑞鷹所蔵史料)
5・12	近代史料撮影(伊豆家文書)
5・13	近代史料調査(県政史料の収集分担について)

る。これはいわゆるシティ・Cityの北側の、現在のロンドンの中心部に位置するところであるが、もと Brick Lane と呼ばれ、一八六一年までは一三番地までしかない。その翌年一八六二年に Central Street と改称されているので、このとき以降に恐らく拡張され新しい住居が建設されたのだろうと思われる。兄のサミュエルが生れたのは 6 Langton Avenue で、この通りの名は、現在の地図ではロンドンに三か所あるが、いずれもそれが含まれる筈の St. Luke 地区のものではない。幸いに一八七一年の地図にそれを見つけたが、南北に走る Central Street の中央から僅かに南よりの位置から東に伸びたせいぜい四〇―五〇m の通りである。ここに住んで長男サミュエルをもうけた家族は、その後まだ真新しい Central Street に移り、エダを産んだのである。現在この通りはなくなっている。ドイツ軍の空襲をうけてその後復興の過程で消えたのではないかと思われる。

エダの家族がこの街の真中に住んだのは、父サミュエルが郵便局に勤務していたからだろう。長男を産んだときは General Post Office Stamp 、「エダを産んだときは郵便集配人をしていた。」

ところで、一八七一年の Census にこの家族をみつけることが出来た。同じ一三六番地に三世帯住んでいる。四八歳と四四歳の未婚の姉妹 (Harriet Capper, Marcha Capper) 、「いでサミュエルの四大家族、そして若い夫婦 (William Taylor と Elizabeth) である。」この一八七一年には郵便配達簿と書いてよいと思ふが「London Post Office-Street」がある。これを見ると、「一三六番地は「Capper-Miss Harriet & Martha Ladies School」との記載があつて、他の二家族は載せられていない。結局次のように考えられるだろう。この建物は三階建て、一階にケイパー姉妹が小さなレディズスクールを開いており、二階にエダの家族、三階にテイラー夫婦が住んでいたと。

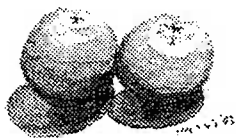
ところで、この Census の職業欄を見ると、サミュエルのところは空白である。Postman というのは隠す必要のない職業であろうから、この時期彼は失業していたのではないかと考えられる。内田守は、エダについて「幼い時両親に死別し、兄が一人あつたが、病身であつたので、伯母のミス・リデルのもとで生長した」(「ライト女史の人間像とその最後」「ユーカリの実を待ちて」)と書いているが、失業の原因は病氣なのかもしれない。一八八一年の Census には、エダの家族は同所には見い出せない。ひょっとしたら、それまでの間に、両親をあいっいでなくしたのか、そして、The Mumbles のハンナの家に幼い身を寄せたのか、と想像している。一八八六年の母ハンナの死に立ち会つたのは、このエダの兄サミュエルであつた。

四

この兄サミュエルは、その後どうなったのか。「病身だった」と言われ、祖母ハンナの死を見とつたあと、彼もまた逝つたのか、それとも、エダがハンナのあとを追つて日本に行つたあとも生きながらえ、いまその子孫がどこかにいるのか。エダが一九四一年国外追放をされたとき、オーストラリアに行つて、本国イギリスに戻らなかつたのは、あるいはもはや身寄りも絶えてしまつていたためなのか、いずれも疑問である。

英国滞在の残りの時間は三カ月を切つたが、あとどれだけのことが判明するか、私自身楽しみである。これまでの調査は、熊本出身で在英三十七年といふ Momoko Williams さんの全面的な助けをかりて進めて来た。末筆ながら誠意を表しておきたい。(一九九三年九月二日 ロンドン はバーネット区の寓居にて)

5	14	近代史料調査 (新聞史料原稿化統一作業)
5	17	現代史料調査 (聞き取り調査)
5	21	近世史料調査 (中根家文書)
5	22	近世史料調査 (近世史料編纂記載予定史料検索)
5	25	第二十三回原始・古代専門部会 (平成五年度事業計画について)
5	28	第十八回自然専門部会 (平成五年度実施計画について)
5	28	近世史料調査 (北岡神社)
5	28	近代史料調査 (新聞史料原稿化統一作業)
5	29	第二十二回民俗・文化財専門部会 (聞き取り調査報告)
5	30	近代史料調査 (県政史料検索)
6	1	現代史料調査 (熊本の自衛隊について聞き取り調査)
6	4	第二十七回現代専門部会 (担当分野別抽出項目について)
6	10	近代史料調査 (新聞史料編纂打ち合わせ)
6	13	近世史料調査 (近世史料編纂記載史料検索)
6	14	自然史料調査 (動物分科会の調査計画について)
6	15	近世史料調査 (木村家)
6	16	近世史料撮影 (医育会館・薬園関係)
6	17	近代史料調査 (県政史料収集状況について)
6	18	近代史料調査 (新聞史料編纂打ち合わせ)
6	25	近代史料調査 (大神宮史料収集のための検索)
6	26	第二十三回民俗・文化財専門部会 (聞き取り調査報告等について)



好評

発売中

(全3巻)

▼史料編 第二巻 古代・中世

▼史料編 第九巻 新聞 下 現代

▼別編 第一巻 絵図・地図 一〇、三〇〇円

(送料別)

市内の主な書店でお求めください。

▼予告▲

第二回配本

史料編 第三巻 近世 I

史料編 第九巻 新聞 上 近代

A5判/各巻約一、〇〇〇ページ

上製箱入/価格未定

史料編 第二巻 古代・中世

造本・体裁=A5版/丸背上製本(布クロス)、
ケース入り/本文 965ページ

- 市域にかかわる文献資料(文書・記録・造像銘・金石文)を網羅。
- 新発見のものをふくめ鹿子木荘・神蔵荘にかかわる全史料を収載。
- 熊本市所在の毛利・小早川氏関係の新史料乃美文書百七十六点を一括紹介。

史料編 第九巻 新聞 下 現代

造本・体裁=A5版/丸背上製本(布クロス)、
ケース入り/本文 962ページ

- 昭和20年8月15日(終戦)から、平成3年2月18日(4町合併式典)まで、熊本市に関連する新聞記事のなかから厳選した1542項目と、論説29項目を収録。
- 史料は年代順に編集、巻末に項目別索引を付載。
- 戦後50年に及ぶとる熊本市の現代像を「概説」とし、小史の形で浮き彫りに。

別編 第一巻 絵図・地図(二分冊)

造本・体裁=B4版/角背上製本(布クロス)、
ケース入り/上巻246ページ、下巻276ページ

絵図・地図 上 中世・近世

- 肥後の国絵図をはじめ、城下の武家屋敷と新発見の町絵図を刻明に解説し、原図と併載。これまでにない新しい手法で104点を収載。
- 解説を付し、見やすい大型B4版。

絵図・地図 下 近代・現代

- 置県後の郡村図・郡村誌を一括収載。明治～平成に至る市街図(友好・姉妹都市も含む)及び土地分類図など多彩に204点を収載。
- 解説を付し、見やすい大型B4版。

史料調査に

ご協力いただいた方々

(自平成五年一月至六月)

(敬称略)

木村経頼(泗水町)、伊豆英一(大江一丁目)、中根弘子(大江三丁目)、高岡弘道(福岡市)、坂田幸之助(玉東町)、岩崎彰代志(湖東二丁目)、瑞鷹酒造(株)(川尻町)、岡村良昭(出水五丁目)、吉本明(龍田町)、河内総合支所、北部総合支所、扇田環境センター、平成学園、熊本市文化課(御馬下の角小屋)、北岡神社、県立図書館、藤崎八幡宮、熊本大神宮、熊本善意銀行、熊本市立図書館

編集後記

市制施行百周年を記念して着手された「新熊本市史」の編纂事業も六年目を迎え、編纂委員、専門員の先生方をはじめ、多くの市民の皆様のご協力を得て、今回、予定どおり第一回の発行をすることができました。厚くお礼を申し上げます。

「まずは今後の刊行に大きな期待を抱かせる第一回配本と言って良い」(熊日社説)との評価もいただいております。

どうか多くの方々にご覧いただきたいと思っております。

事務局では、第二回配本に向けて早くもフル回転です。これからも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。